

# 博士論文（要約）

論文題目 西鶴奇談研究  
氏 名 梁誠允

【目次】

凡例

序章

第一章 伝承の想像力

第一節

『西鶴名残の友』巻三之七「人にすぐれての早道」と狐飛脚伝承

- 一 はじめに……………一〇
- 二 狐飛脚伝承と志一稻荷伝説……………一〇
- 三 与次郎狐伝説……………一一
- 四 報われない忠義譚・異類婚姻譚……………一九
- 五 狐による慰撫……………二〇
- 六 おわりに……………二二

第二節

フィクションとしての報道説話

—『懐硯』巻五之二「明て悔しき養子が銀筥」の虚偽—

- 一 はじめに……………二四
- 二 『棠陰比事』「道讓詐囚」の詐術……………二五
- 三 民話・靈驗譚の発想とねじれ……………二八
- 四 装われる報道説話……………三〇
- 五 おわりに……………三四

第三節

『懐硯』巻三之三「気色の森の倒石塔」と「猫と南瓜」

—民話の想像力を糸口に—

- 一 はじめに……………三八
- 二 解釈の入り口……………三八
- 三 飼い猫の怪異—もう一つの「猫と南瓜」—……………四〇
- 四 男の怨念—俳諧における〈猫の妻恋〉—……………五〇

五	奥女中という背景……………	五二
六	おわりに……………	五三

## 第二章 西鶴奇談の様式に関する試論……………

五六

### 第一節 方法としての〈なぞ問答〉……………

五六

#### ―『西鶴諸国はなし』巻一之五「不思議のあし音」の遊戯―

一	はじめに……………	五六
二	奇人逸話からなぞ解きゲームへ……………	五七
三	仕組まれたなぞ遊び……………	五九
四	「おかた米屋」の造形……………	六二
五	なぞ問答型の変容……………	六四
六	おわりに……………	六七

### 第二節 『懷硯』巻五之三「居合もだますに手なし」の手法……………

七四

一	はじめに……………	七四
二	素材論の射程と問題の所在……………	七四
三	『太平記』の兵略―〈面皮を剥ぐ〉という行為―……………	七七
四	お七の機智とその背景……………	八〇
五	おわりに……………	八四

### 第三節 書簡体の様式と仏教説話の発想……………

八八

#### ―『万の文反古』巻三之三「代筆は浮世の闇」と楽出家―

一	はじめに……………	八八
二	従来の読み方・切り捨てられた細部……………	八八
三	「我命の我まゝに死れざる」因果―類話の発想を手がかりに―……………	九〇
四	懺悔譚の様式との距離―楽出家の群像―……………	九二
五	因果譚の様式との距離―強欲・苦患のあり様―……………	九五
六	おわりに……………	九六

第二章 西鶴奇談の位相……………九九

第一節 話柄の行方……………九九

- 一 『棠陰比事』 「彦超虚盗 道讓詐囚」をめぐって……………九九
- 二 はじめに……………九九
- 三 初期の形態―機智話の素材源……………九九
- 四 「小判も石となる思案箱」の智慧……………一〇二
- 五 『風流宇治頼政』と「明て悔しき」―長編構成の梃……………一〇五
- 六 誑かされる妾―氣質を現すための手管……………一〇九
- 七 おわりに……………一一二

第二節 〈欺瞞〉と〈機智〉の継承と創造……………一一四

- 一 『棠陰比事』から『大岡政談』 「小間物屋彦兵衛伝」へ……………一一四
- 二 はじめに……………一一四
- 三 好まれるモチーフ……………一一五
- 四 「道讓詐囚」と『鎌倉比事』 「因果の廻会常陸帯」……………一一九
- 五 仮構される名判例……………一一九
- 六 「諸国因果物語」 「二十二年を経て妻敵を打し事」の構想……………一二五
- 七 「小間物屋彦兵衛伝」の生成……………一二五
- 八 写本『大岡美談録』から活版本『<sup>古今</sup>美談 大岡仁政録 小間物屋彦兵衛伝』へ……………一四六
- 九 おわりに……………一四六

終章……………一五二

初出一覧……………一五三

【本文】

五年以内に出版予定である。

## 【参考文献一覧】

- 西鶴作品（浮世草子・俳諧）の本文はすべて『定本西鶴全集』（中央公論社）によった。  
西鶴以外の俳諧の用例は基本的に「古典俳文学大系」CD-ROM版編集委員『古典俳文学大系 CD』（集英社、二〇〇四）に拠った。

### ◆序章

富士昭雄「第三章 西鶴浮世草子の特質 二 西鶴の説話性」（『西鶴と仮名草子』、笠間書院、二〇一

一）

森山重雄「あとがき」（『西鶴の研究』、新読書社、一九八二）

中村幸彦「西鶴における説話性・反説話性」（『国文学 解釈と鑑賞』第三十八巻四号〈西鶴・近世小説の源流〉、一九七三・三）

有働裕一『西鶴諸国ばなし』論の課題」（『西鶴はなしの想像力』、翰林書房、一九九八）

国書刊行会『徳川文藝類聚 巻四』、国書刊行会、一九一五・七）

山口剛「怪異小説について」（『山口剛著作集 巻二』、中央公論社、一九七二）

鈴木敏也「怪異小説作家としての上田秋成」（『秋成と馬琴』、丁子屋書店、一九四八）

吉田幸一「解題」（『近世怪異小説』近世文藝資料三、古典文庫、一九五五）

野田寿雄「怪異小説の展開」（『解釈と鑑賞』、一九六一・一）

木越治「解説」（『浮世草子怪談集』、国書刊行会、一九九四）

堤邦彦「怪異小説概観」（『江戸の怪異譚』、ぺりかん社、二〇〇四）

### ◆第一章第一節

野間光辰「西鶴の方法」（『西鶴新新攷』岩波書店、一九八一、初出は雑誌『西鶴研究』第一輯、一九四二）

暉峻康隆「西鶴名残の友」（『西鶴 研究ノート』、中央公論、一九五三）

麻生磯次・富士昭雄訳注『決定版・対訳西鶴全集十六 西鶴俗つれづれ 西鶴名残の友』（明治書院、一九八四）

井上敏幸校注「西鶴名残の友」（『新日本古典文学大系七七 武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西

鶴名残の友』、岩波書店、一九八九）

柳田国男「狐飛脚の話」（『孤猿随筆』、岩波書店、二〇一一）

鈴木棠三『鎌倉古絵図・紀行 鎌倉紀行編』（東京美術、一九七六）

『絵入鎌倉物語』（『仮名草子集成 第十八卷』、東京堂出版、一九九六）

『耳能垢』（秋田県公文書館所蔵の落穂文庫所蔵、資料番号「落二四五〇」）

『伊豆園茶話』（『第一期 新秋田叢書 第十卷』、歴史図書社、一九七二）

村上辰午郎「宮古町と秋田与治郎稻荷の伝説」（『旅と伝説 第二年第二号』、三元社、一九二九）

菊池和博「伝説と史実の対話―与次郎稻荷神社と久保田城主佐竹義宣―」（『山形県博物館研究報告 十七号』一九九五・三）

沢渡吉彦編『出羽の民話』（未来社、一九五八）

信濃教育会北安曇会編『北安曇郡郷土誌稿 第二輯 口碑伝説篇』（郷土研究社、一九三〇）

中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話 一（東洋文庫三〇六）』（平凡社、一九七七）

杉原丈夫・石崎直義『若狭・越前の民話』（未来社、一九六八）

赤見貞編『小浜神社誌』（小浜神社社務所、一九七四）

『諸国里人談』（日本随筆大成編輯部『日本随筆大成 第二期二十四』、吉川弘文館、一九七五）

京都大学国語学国文学研究室編『京都大学蔵大物本稀書集成 第七卷 雑話一』（臨川書店、一九九六）

野津龍編『鳥取県伝説集 因幡編』（山陰放送、一九八九）

『三州奇談』（堤邦彦・杉本好伸編『近世民間異聞怪談集成』、国書刊行会、二〇〇三）

『提醒紀談』（日本随筆大成編輯部『日本随筆大成 第二期二』、吉川弘文館、一九七三）

『大和怪異記』（堤邦彦・杉本好伸編『近世民間異聞怪談集成』、国書刊行会、二〇〇三）

『近世文学資料類従・古板地誌編十五 吉野山独案内/南北二京霊地集』（勉誠社、一九八一）

### ◆第一章第二節

中村幸彦「西鶴における説話性・反説話性」（『国文学 解釈と鑑賞』第三十八卷四号〈西鶴・近世小説の源流〉、一九七三・三）

富士昭雄「第三章 西鶴浮世草子の特質 二 西鶴の説話性」（『西鶴と仮名草子』、笠間書院、二〇〇一）

小峯和明「第一章 説話の言説」（『説話の言説―中世の表現と歴史叙述』、森話社、二〇〇二）

小峯和明「説話の言説」『説話の講座二 説話の言説』（勉誠社、一九九二）

池上洵一「説話の生成と伝承―世間話について―」（『説話の講座一 説話とは何か』、勉誠社、一九九一）

中村幸彦「西鶴と説話」（『日本文学』第五卷第二号、一九五六・二）

- 益田勝実「説話におけるフィクションとフィクションの物語」（『国語と国文学』第三十六卷四号、一九五九・四）
- 池上洵一「説話の虚構と虚構の説話」（『日本文学』第三十五卷第二号、一九八六・二）
- 暉峻康隆「第四章「西鶴諸国はなし」と「懐硯」」（『西鶴 評論と研究 上』、中央公論社、一九五〇）
- 水田潤「「諸国はなし」の近世的性格」（『西鶴論序説』、桜楓社、一九七三）
- 『棠陰比事診解』（東京大学総合図書館蔵本、資料番号「南葵文庫・L11-1339」）
- 『棠陰比事加鈔』（東京大学総合図書館蔵本、資料番号「南葵文庫・L11-1836」）
- 『棠陰比事物語』（東京大学総合図書館蔵本、資料番号「E24-1313」）
- 長島弘明「常磐松文庫蔵『棠陰比事』（朝鮮版）三卷一冊」（『実践女子大学文芸資料研究所年報』第二号、一九八三・三）
- 大久保順子「『棠陰比事』系列裁判話小考―「診解」「加鈔」「物語」の翻訳と変容―」（『香椎潟』第四十四号、一九九九・三）
- 長谷川強「浮世草子と実録・講談―赤穂事件と大岡政談の場合―」（『國學院雑誌』第九十五卷第十二号、一九九四・十二）
- 関敬吾・野村純一・大島廣志編編『日本昔話大成十一 資料編』（角川書店、一九八〇）
- 稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観 第二十八卷 昔話タイプ・インデクス』（同朋舎出版、一九八八）
- 『西行撰集抄』（早稲田大学図書館蔵本、請求記号「へ二二・〇一七〇八」）
- 原田行造「『本朝法華験記』所収説話の諸特徴（下）」（金沢大学教育学部紀要第二十三号、一九七四・十二）
- 長友千代治編『重宝記資料集成 第十五卷 礼法・服飾 二』（臨川書店、二〇〇五）
- 宮本又次「第一部 近世商業の研究 第六章 近世の商業利潤」（『近世商業組織の研究』、有斐閣、一九三九）
- 宮本又次「第四章 問屋・仲介の仲間研究―運送上の協定」（『日本近世問屋制の研究』、刀江書院、一九七二）
- 麻生磯次・富士昭雄訳注『決定版・対訳西鶴全集五 西鶴諸国はなし 懐硯』（明治書院、一九九三）
- 箕輪吉次「『懐硯』の素材と方法」（『学苑』第五一〇号、一九八一・六）



## ◆第一章第三節

麻生磯次・富士昭雄訳注 『決定版・対訳西鶴全集五 西鶴諸国ばなし 懷硯』(明治書院、一九九三)  
檜谷昭彦監修 『一冊で怪談ばなし100冊を読む』(友人社、一九九二)  
関敬吾・野村純一・大島廣志編 『日本昔話大成 第十一 資料編』(角川書店、一九八〇)  
稲田浩二・小沢俊夫編 『日本昔話通観 第二十八巻 昔話タイプ・インデクス』、同朋舎出版、一九八八)

常光徹 『『猫と南瓜』の構造』(『説話・伝承学』八十六、桜風社、一九八七)

稲田浩二・立石憲利編 『中国山地の昔話 賀島飛左嬢伝承四百余話』(三省堂、一九七四)

『日本昔話通観 第二十五巻 鹿児島県』(同朋舎出版、一九八〇)

『日本昔話大成 第七巻 本格昔話六』(角川書店、一九七九)

山形短期大学民話研究センター資料叢書 置賜のむかし―昔話・伝説・わらべうた』(山形短期大学民話研究センター、二〇一〇)

有馬英子・遠藤庄治編 『日本の民話 十二 九州(二)・沖縄』(ぎょうせい、一九七九)

静岡県女子師範学校郷土研究会編 『静岡県伝説昔話集』(静岡谷島屋書店、一九三四)

『御伽厚化粧』(富山大学附属図書館ヘルン文庫蔵本[資料番号・二二七八])

高田衛編 『叢書江戸文庫二六 近世奇談集成(二)』(国書刊行会、一九九二)

久保田淳訳注 『新古今和歌集 下』(角川学芸出版、二〇〇七)

石井良介編 『徳川禁令考 前集』卷二十一(創文社、一九五九)

神宮司庁編 『古事類苑 官位部三』(吉川弘文館、一九七八)

## ◆第二章第一節

中村幸彦 『第三章 口頭話体の様相 西鶴の話術』(『中村幸彦著述集 第二巻』、中央公論社、一九八二)

富士昭雄 『『諸国はなし』の方法』(『西鶴と仮名草子』笠間書院、二〇一一)

麻生磯次・富士昭雄訳注 『決定版対訳西鶴全集』(明治書院、一九九二)

井上敏幸校注 『西鶴諸国ばなし』(『新日本古典文学大系 好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』、岩波書店、一九九二)

宗政五十緒校注 『西鶴諸国はなし』(『新編古典文学全集 井原西鶴集②』、小学館、一九九六)

西鶴研究会編 『西鶴諸国はなし』(三弥井書店、二〇〇九)

- 前田金五郎「近世文学雑記 十三 右望都」（『近世文学雑記帳』、勉誠出版、二〇〇七）
- 加藤康昭「第二章一節 呪術的宗教者としての盲人」（『日本盲人社会史研究』、未来社、一九七四）
- 馬淵卯三郎『糸竹初心集の研究―近世邦楽史研究序説』（音楽之友社、一九九二）
- 浅野建二編『日本歌謡研究資料集成 第三卷』（勉誠社、一九七八）
- 『安倍晴明物語』（『仮名草子集成 第一卷』、東京堂出版、一九八〇）
- 飯田道夫「二十三夜待」（『日待・月待・庚申待』、人文書院、一九九二）
- 柳田國男「年中行事覚書 二十三夜塔」（『定本柳田國男集 第十三卷』、筑摩書房、一九六九）
- 桜井徳太郎「第二編第一章三節 民間信仰の講」（『講集団成立過程の研究』、吉川弘文館、一九六二）
- 鈴木棠三「第一章 なぞと文芸」（『なぞの研究』、講談社、一九八一）
- 鈴木棠三編『中世なぞなど集』（岩波書店、一九八五）
- 鈴木棠三「第四章 なぞ」（『なぞと遊び』、中央公論社、一九七五）
- 鈴木棠三編『新版ことば遊び事典』（東京堂出版、一九八二）
- 『閨里歳時記』（『続日本随筆大成別巻―民間風俗年中行事・上』、吉川弘文館、一九八三）
- 高槻泰郎『近世米市場の形成と展開』（名古屋大学出版会、二〇一一）
- 吉見孝夫「二段なぞ資料、狩野文庫蔵『新板なぞづくし』」（『札幌国語研究』五、二〇〇〇）
- 広嶋進「『西鶴諸国ばなし』の語りと声―巻一の五「不思議のあし音」を中心に―」（『国文学研究』一三三、二〇〇一・三）
- 藤田貞一郎・宮本又郎・長谷川彰「第一章 近世前期の商業」及び「商品取引経路と商業慣行」（『日本商業史』、有斐閣、一九九五）
- 『京羽二重織留』（『新修京都叢書 第二卷』、臨川書店、一九九三）
- 「伏見奉行触書」「恩知柳宮秘鑑」「増補登船独案内」（『御大札記念京都府伏見町史』、臨川書店、一九二九）
- 『伏見鑑』（『新撰京都叢書 第五卷』、臨川書店、一九八六）
- 「東海道宿村大概帳」（『史料京都の歴史 16 伏見区』、平凡社、一九九二）
- 堀内明博ほか編『伏見の古絵図』（伏見城研究会、二〇一一）

## ◆第二章第二節

- 富士昭雄「西鶴小説における時事的素材」（『西鶴と仮名草子』、笠間書院、二〇一一）
- 長谷あゆす「『懷硯』巻五の三「居合もだますに手なし」考―「仁政」に対する風刺をめぐって―」

- (「国語国文」第八十一卷第七号、二〇二一・七)
- 吉田徳太郎編『池田家履歴略記 上巻』(日本文教出版株式会社、一九六三)
- 『太平記』(日本古典文学大系三十四・三十五『太平記』、岩波書店、一九六五)
- 『太平記評判秘伝理尽鈔』(高知城歴博山内文庫所蔵本、資料番号「ヤ二一〇・一五二」)
- 加美宏「『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって」(『日本文学』第三十一卷第一号、一九八二・二)
- 『今川物語』(横山重校訂『古浄瑠璃正本集 第三冊』、角川書店、一九六四)
- 亀田純一郎「太平記読みについて」(『国語と国文学』第八卷第十号、一九三二・十)
- 若尾政希「第五章 岡山藩制の確立と「太平記読み」」(『「太平記読み」の時代』、平凡社、二〇一  
二)
- 平松義郎「第二部 幕府の刑事訴訟法 後篇第一章第一節 犯罪の探知」(『近世刑事訴訟法の研究』、  
創文社、二〇〇四)
- 『検使階梯』(国立国会図書館蔵本、資料番号「勝海舟関係文書・七十八」)
- 『検使階梯』(早稲田大学図書館蔵本、資料番号「ワ〇三・〇二四二二」及び「ワ〇三・〇四八四六」)
- 『御仕置裁許帳』(石井良助編『近世法制史資料叢書一』、創文社、一九五九)
- 『棠陰比事加鈔』(東京大学総合図書館、資料番号「南葵文庫・L11・八三六」)
- ◆第二章第三節
- 谷脇理史「『万の文反古』における書簡体の意味」(『西鶴研究序説』、新典社、一九八二)
- 谷脇理史「三『萬の文反古』の論」(『西鶴 研究と批評』、若草書房、一九九五)
- 暉峻康隆「萬の文反古」(『西鶴 評論と研究(下)』、中央公論社、一九五〇)
- 神保五彌校注『万の文反古』(『新編日本古典文学全集 井原西鶴③』、小学館、二〇〇三)
- 谷脇理史校注『万の文反古』(『新日本古典文学大系七七 武道伝来記 西鶴置土産 万の文反古 西  
鶴名残の友』、岩波書店、一九八九)
- 『沙石集』(東京大学総合図書館蔵本、資料番号「C四〇・一一四九」)
- 石田瑞麿「第四章 末法と浄土教」(『浄土教の展開』、春秋社、一九七六)
- 渡辺貞麿・石橋義秀「欣求浄土―仏教説話を軸にして」(『日本文学と仏教思想』、世界思想社、一九八  
四)
- 中嶋隆「好色一代女」(『岩波講座 日本文学と仏教 第四卷 無常』、岩波書店、一九九四)
- 『清水物語』(渡辺守邦・渡辺憲司編『新日本古典文学大系七四 仮名草子集』、岩波書店、一九九二)

『為愚痴物語』（朝倉治彦編『仮名草子集成第二巻』、東京堂出版、一九八二）  
中嶋隆「死ぬことのできない男の恐怖」（『西鶴が語る江戸のミステリー——怪談・奇談集——』、ぺりかん社、二〇〇四）

『本朝故事因縁集』（京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成 第八巻』、臨川書店、一九九五）

### ◆第三章第一節

『棠陰比事加鈔』（東京大学総合図書館蔵本、資料番号「南葵文庫・L11・八三六」）

『棠陰比事物語』（東京大学総合図書館蔵本、資料番号「E24・1313」）

石井良介編『徳川禁令考 後集』巻二十八「刑律條例之部」（創文社、一九六〇）

高柳晋三・石井良介編『御觸書寛保集成』（岩波書店、一九三四）

『日本桃陰比事』（国文学研究資料館蔵本、資料番号「ナ4・六三六〇七」）

『嫁娶重宝記』（長友千代治編『重宝記資料集成 第十五巻 礼法・服飾 二』、臨川書店、二〇〇五）

長谷川強「第一章 三節 宝永の浮世草子」（『浮世草子の研究』、桜風社、一九六九）

木越治・福島万葉子「八文字屋本『風流宇治頼政』の典拠——藤岡作太郎の指摘を手がかりに」（『金沢大学国語国文』三四、二〇〇九・三）

『宇治頼政歌道扇』（東京大学総合図書館霞亨文庫蔵本、資料番号「霞亨文庫目録九二八」）

『風流宇治頼政』（『八文字屋本全集 第八巻』、汲古書院、一九九五）

佐伯孝弘「第一章第二節 其積気質物の方法——西鶴利用の意図——」及び、当節の「補論」（『江島其積と

気質物』、若草書房、二〇〇四）

宮本祐規子「第二章第四節 時代物浮世草子作者論」（『時代物浮世草子論——江島其積とその周縁』、笠間書院、二〇一六）

『世間妾形気』（『上田秋成全集 第七巻』、中央公論社、一九九〇）

森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釈』（国書刊行会、一九七七）

### ◆第三章第二節

日本映画データベース（<http://www.jmdb.ne.jp>）

吉沢英明編著『講談明治期速記本集覧』、私家版、一九九五）

『<sup>古今</sup>実録 大岡仁政録 小間物屋彦兵衛伝』（栄泉社、一九〇三）

中村幸彦「二 実録、講談について——2 実録研究綱領」（『中村幸彦著述集 第十巻』、中央公論社、一

九八三)

『棠陰比事加鈔』(東京大学総合図書館蔵本、資料番号「南葵文庫・L11・八三六」)

『棠陰比事物語』(東京大学総合図書館蔵本、資料番号「E24・1313」)

長谷川強「浮世草子と実録・講談―赤穂事件と大岡政談の場合―」(『國學院雜誌』第九十五卷第十二号、一九九四・十二)

長谷川強は「口 八文字屋本周辺 宝永の浮世草子―巷説・先行作品との関連について―」(『浮世草子新考』、汲古書院、一九九二)

長谷川強『浮世草子の研究』(桜風社、一九六九)

三田村鳶魚「権三と助十」(『史実と芝居と』、青蛙房版、一九五八)

『享保世説』(宮内庁書陵部書陵部蔵本、資料番号「マイクロ二二五・一一」)

辻達也「大岡政談と名判官物語」(『大岡越前守』、中央公論社、一九六四)

辻達也篇著『東洋文庫 大岡政談2』(平凡社、一九八四)

『大岡政談』(有朋堂書店、一九一四)

『大岡政談』(博文館、一九二九)

岡田哲「馬場文耕と『大岡政談』―大岡忠相出世譚を軸として―」(『國學院大學大学院紀要』第十二輯、一九八一・三)

『大岡美談録』(新潟県胎内市黒川地区公民館図書館蔵本、国文学研究資料館マイクロフィルム、請求記号「三六二・六六・二」)

『大岡美談』(立教大学図書館蔵本、資料番号「乱歩蔵近世NDC9・九一三・〇五六」)

『大岡美談』(東京都立中央図書館蔵本、資料番号「加ポジ一四三三・一四三六」)

『太平記』(日本古典文学大系三十四・三十五『太平記』、岩波書店、一九六五)

『太平記評判秘伝理尽鈔』(高知城歴博山内文庫蔵本、資料番号「ヤ二一〇・一五一」)

「実録体小説は小説か―「事実と表現」への試論―」(『日本文学』第五十卷第十二号、二〇〇一・十一)

『古今事文類聚』(早稲田大学図書館逍遙文庫蔵本、資料番号「文庫〇六・〇〇〇二八」)

『新鍔類解官様日記故事大全』(東京大学総合図書館蔵本、資料番号「H三〇・一五」)

『大岡仁政録』(国文学研究資料館蔵本、資料番号「ナ四一五〇六」)

藤沢毅「古今実録」シリーズの出版をめぐる(松野陽一編著『幕末・明治期の国文学 明治開花期

## 【論文の内容の要旨】

長い日本文学の歴史において、実質的な庶民文学は、井原西鶴(寛永十九年〜元禄六年)の天和二年刊『好色一代男』によって誕生した。同時代の人間の姿や心のあり方、世態風俗に深く心を傾け、写実的にそれらを描き出した西鶴の小説は、当世風(すなわち同時代風)小説という意味で「浮世草子」と呼ばれる。しかし、西鶴の浮世草子は、当代の風俗と人々の心情の写実的な描出に終始するのではなく、前代からの説話および古典の解体と再生が図られ、その多くは奇談として作中に豊富に盛り込まれている。従来、西鶴の奇談を対象とした本格的な研究は、龐大な前代の説話等との比較や西鶴の題材との向き合い方の究明、江戸時代に特徴的な異界観・怨霊観・因果観、異類認識・宗教観の把握等々、難しい手続きが必要とされるため、極めて少なかった。本「西鶴奇談研究」は、同時代の風俗世態と(世の人心)を描破するにあたり、西鶴が様々な奇異な素材を用いてどのように表現の可能性を切り開いたかを考察したものである。研究の主眼は、色々な説話の材料が入り混じり、既存の説話に内在している伝統的な思考や感性が複合・変形しながら生成する西鶴奇談のメカニズムを捉えること、それによって西鶴奇談が独自の相貌を表している瞬間を捉えることにある。

本論文は三つの章から成っている。以下、章ごとの基本構想及び各節の内容を要約する。

第一章「伝承の想像力」では、典拠不明とされていたいくつかの西鶴奇談の原拠を報告した。西鶴奇談の中に伝承世界の想像力が持ち込まれ、それが書き手と受け手との間に暗黙の了解を生じさせながら、同時代の言説と絡み合い(違和と葛藤を引き起こす要素として機能し)、あるいは逆説的な形で利用されることで、当時の町人達・武家の世態や人心を劇的に描出するに相応しい手段として形作られていく様相が捉えられる。

第一節「『西鶴名残の友』巻三之七「人にすぐれての早道」と狐飛脚伝承」では、元禄十二年刊『西鶴名残の友』巻三之七「人にすぐれての早道」を取り上げ、本話が志一稻荷伝説・与次郎稻荷伝説をはじめ、主人のため早足で活躍した狐が非業の死を迎える「狐飛脚伝承」を典拠としたことを証明し、種々の狐飛脚伝承の話型による分類をも試みた。通例の狐伝承は狐が主君から忠義を認められ死後も顕彰される狐忠義譚・狐褒賞譚であったのに対し、本話の狐は主君や朋輩から疎外され、その忠心は報われない。さ

らに妻が狐の夫を殺し自害してしまうという結末は、西鶴が子別れ・夫婦別れという悲劇的な要素をもつ異類婚姻譚を持ち込んだものである。西鶴は狐飛脚・異類婚姻譚（狐婿）・妖狐退治などの様々な狐伝承の話を盛り込みながら、狐伝承をめぐる既有的知識・従来の認識枠を宙吊りにしたり、伝統的心象をひっくり返したりする方法により、忠誠を尽くしても報われず殺害されるという特異な悲劇に仕立て直していることを明らかにした。

第二節「フィクションとしての報道説話——『懐硯』巻五之二「明て悔しき養子が銀筥」の虚偽——」では、貞享四年刊『懐硯』巻五之二「明て悔しき養子が銀筥」を取り上げ、本話に『棠陰比事』「道讓詐囚」の物語に原型を求めることのできる詐術譚と「大晦日の客」の民話が入り入れられていることを証明した。

「道讓詐囚」の犯罪の手法と逮捕のための欺瞞策は、町人世界における経済的な危機を打開する方策へと組みかえられ、世渡りのために内証を誤魔化し、見せかけの詐術を使う町人達の関係が見事に形象化されている。また、民話「大晦日の客」の発想と『撰集抄』の霊験譚を逆説的な形で用いながら、町人達の経営破綻から再起しようとする情念、その心が動く刹那を可視化することに成功している。同時代の世態や人心を描出するに相応しい手段として、伝承世界の想像力が持ち込まれ、あたかも現実であるかのように虚構の説話を紡ぎ出す西鶴説話の創作的意義が明らかになった。

第三節「『懐硯』巻三之三「気色の森の倒石塔」と「猫と南瓜」——民話の想像力を糸口に」では、未解読のまま残されている巻三之三「気色の森の倒石塔」を取り上げ、民話「猫と南瓜」の発想と俳諧における〈猫の妻恋〉の発想とが構想の重要な契機として働いていることを確認した。現在知られている民話「猫と南瓜」の話型とは違う、埋もれていた民話「猫と南瓜」のパターンを新たに指摘して話型の補完を行いつつ、本話を構成する伝承の文脈を掘り下げた。西鶴は民話の発想をひねったり、俳諧の発想を応用したりしつつ、屋敷奉公の裏事情（傍輩間と男女間の葛藤）に焦点をあてている。従来顧みられてこなかった民話のモチーフが、西鶴奇談の生成メカニズムの分析から新たに証明されたことは、西鶴奇談の背後には豊かな日本の伝承的想像力が潜んでおり、今後それらがさらに発見できる可能性を窺わせるものである。

第二章「西鶴奇談の様式に関する試論」では、西鶴奇談には不思議な逸話という内容面のみならず、様式面においても極めて周到な工夫が凝らされており、当代の読者が話の表現技法そのものを楽しむ面が窺えることを指摘した。多様なジャンルの様式を枠組みとして援用し、同時代の人情世態を描き出す西鶴の実験的な試みが明らかになる。

第一節「方法としての〈なぞ問答〉——『西鶴諸国はなし』巻一之五「不思議のあし音」の遊戯——」では、

貞享二年刊『西鶴諸国はなし』巻一之五「不思議のあし音」に〈なぞ問答型〉の語りが仕組まれていることに着目し、従来の〈なぞ文芸〉の諸形式と比較検討した。その結果、本話の面白さは、表面上は奇人の逸話を語りつつ、実は〈なぞ文芸〉の形式・発想様式を巧みに取り込んだ表現の仕方にあることを指摘した。このような話の様式により、伏見の市井世態や米商人の商行為・旅中の服装風俗等が鮮やかに描破できたことを明らかにした。民間伝承の二段なぞ（描写型・見立て型）の設問の仕方が話の中に取り込まれ語られていく様相は、近世文学史において特記すべき表現方法である。

第二節「『懷硯』巻五之三「居合もだますに手なし」の手法」では、『懷硯』巻五之三「居合もだますに手なし」を取り上げ、報道説話の様式を踏まえつつ虚構の説話が作り出されていく様相を分析した。本話に見える残酷な死体処理の方法（面皮を剥ぐ行為）が実際の事件・巷説に由来するという従来の典拠論を批判的に検証し、西鶴の政治批判・風刺の意図があるとする読み方に疑問を呈した。西鶴は男伊達の性への好奇のまなざしから、奇抜な道具立てとして〈死体の面皮を剥ぐ〉という『太平記』に記述されている合戦時の兵略を完全犯罪を企てる設定に組み合わせ、彼らの情念を劇的に形象化している。同時に正体の識別できぬ変死体事件を構成した上、当時の法秩序を背後に巧みに織り込みつつ『棠陰比事』『道讓詐囚』の話柄も利用して事件解決へのドラマを作りあげている。それによって人物達の奇妙な行為の有り様それを支える心情と論理が異様なほどのリアリティと感銘を持って浮かび上がる。

第三節「書簡体の様式と仏教説話の発想―『万の文反古』巻三之三「代筆は浮世の闇」と楽出家―」では、「秀作」とされる元禄九年刊の書簡体小説『万の文反古』「代筆は浮世の闇」を読み直した。主人公「自心」の苦患のあり様について、『沙石集』『因果物語』『本朝故事因縁集』等の説話集に見られる霊験譚・因果譚・懺悔譚の類話と比較考察した結果、従来の仏教説話の常套話の型と発想を巧妙に変形させ、中世の仏教説話や江戸初期の怪談集に表れている信仰態度とはまったく違う、西鶴の時代における欲望や罪に無自覚な人の心、主人公の自己欺瞞の姿を書簡体の形式（一人称告白体）を使って見事にえぐり出していることを明らかにした。自心の因果理解の欠陥が浮かび上がるように書かれていることと、その因果理解の欠陥に向けられた語り手の批判的視線とは、当代のいわゆる「楽出家」や現世利益のための信仰を軽薄と見る、西鶴の厳しい視線に由来することを指摘した。

第三章「西鶴奇談の位相」では、西鶴奇談とそれを利用した後代の作品とを比較検討しながら、西鶴奇談の独自の語り口を捉え直した。

第一節「話柄の行方―『棠陰比事』『彦超虚盗 道讓詐囚』をめぐって―」では、『棠陰比事』『彦超虚盗 道讓詐囚』の話柄が笑話から西鶴を経由して成立した『日本桃陰比事』（宝永六年刊）巻之六の四



「小判も石となる思案箱からくり」、江島其磧の『風流宇治頼政』（享保五年刊）、上田秋成の『世間妾形氣』（明和四年刊）巻一之一「人心汲てしられぬ朧夜の酒宴」まで如何に受容されてきたかを考察した。各々の作者達が新たな表現の可能性を如何に模索していたかをあぶり出し、西鶴奇談の特徴も逆照射してみた。

第二節「〈欺瞞〉と〈機智〉の継承と創造―『棠陰比事』から『大岡政談』『小間物屋彦兵衛伝』へ―」では、近世期を通して好まれた特定のモチーフと話柄の変容について論じた。『棠陰比事』『道讓詐囚』の話柄が重要な役割を果たしていることに注目し、西鶴と後代の浮世草子・見聞集・実録体小説において〈欺瞞〉と〈機智〉に関わる特定のモチーフ・話柄が如何なる変貌を遂げつつ「日本人好みの型」を形成していき、やがて明治期活版本『<sup>古今</sup>実録大岡仁政録 小間物屋彦兵衛伝』に収束してゆくのかを明らかにした。特に『大岡政談』『小間物屋彦兵衛伝』の話型の原型を正確に定めた上、写本『大岡美談録』から『大岡美談』に成長変化する過程、『<sup>古今</sup>実録大岡仁政録 小間物屋彦兵衛伝』に辿り着くまでの経緯を詳しく分析した。〈欺瞞〉と〈機智〉に関わるモチーフが様々な話材と結合して変容していく様相を把握することにより、西鶴奇談をはじめ、それぞれの作品の魅力を浮き彫りにした。